私の意見

行為規制の表現について

日商岩井フューチャーズ社長
木嶋　正憲

個人投資家の〝過〟保護に反対

自己責任が基本姿勢

改正商品取引所法がいよいよ施行され、同時に全国取引所の共同の清算機関として日本商品清算機構（JCCH）が動き出した。2005年の5月は日本の商品先物取引の歴史に残る大きなマイルストーンとなるであろう。

我々取引会社にとっては、長年慣れ親しんできたものからの変化に対する戸惑いは避けられず、当面は窮屈な思いをすることになるかと思う。しかしながら、当業界もグローバルスタンダードに大きく近づいたことは間違いない。我々が新しい仕組みに慣れるにつれて、国内のみならず海外を含めた個人・法人からの日本の商品先物に対する関心も深まっていくことになるだろう。

改正商品取引所法があまりにも行為規制に重点を置いたように受け止められて、業界内の一部にやや悲観的な声を耳にするが、過去を振り返れば反社会的な取引会社が存在していたことは事実であり、多くの投資家からも長い間改善の期待が寄せられていたことも事実であることから、真摯に受け止めざるを得ないかと思う。そしてこれが投資家の抱いていた不安を拭い去ってくれることにつながることを強く期待している。

ただし、具体的な年齢や収入による投資規制をするような表現には個人的に抵抗がある。アメリカなどであれば〝差別〟として法そのものが訴訟対象になりかねないと思われ、いずれはその表現を見直すことになるのではないだろうか。

そもそも彼我の大きな違いは顧客に占める個人投資家の比率といわれるが、一方では我が国ではあまりにも個人を弱い存在として擁護し過ぎてはいまいか。投資家保護という観点には反対しないが、〝過〟保護には反対である。現在70歳以下の日本人はほとんど義務教育を受けており、60歳以下になると大学への進学率も若い人ほど高くなっている。その教育水準は世界に誇れるもののひとつであろう。にもかかわらず、保護という名目で幼児か欠陥者のような対象としてみているように思えるのは考え過ぎなのであろうか。

平均寿命の伸びには医薬や医療技術の進歩によるところもあるが、個人の健康に対する関心の高さ、すなわち教養によるところも大きく、現在60歳の人もあっという間に75歳になることを考えても、差別に対する不満が顕在化する予感がある。

昨年、フセインが拘束された後とはいえ、不穏な情勢にあるイラクを訪れ、何者かに拉致され、生命の危険にさらされた若者3人に対して、小泉首相をはじめとする政府閣僚やメディアが〝自己責任〟という問題を大きく取り上げた。当時のメディアの取り上げ方が無謀であるという表現を婉曲して使ったと思われる点は別にして、自己責任による行動というのは成人した者が行動する時の基本姿勢であろう。

従って、少なくとも日本の義務教育課程を経て成人した人であれば、自己責任能力を持っているとして、全て商品先物に投資する権利を有しているとするのが妥当ではないかと思う。そうでなければ文部科学省の教育に問題があるということにならないか。業界の新しい門出といえる時期に、さらなる発展のために強く思うところである。

先物協会協賛　シンポジウム

今こそ！　金融経済教育

6月21日　コーディネーター　野中ともよ氏

欧米では、小学生から大学生まで、一貫した「経済教育」が行われている。個人の〝豊かな人生〟を送るライフプランづくりのために金融経済を読み解く能力・知識の大切さを義務教育期間から学んでいる。

21世紀、世界経済が目まぐるしく動く中で、日本でも若い世代や子供たちがいかに経済感覚を身に付け自立していくべきか――を考え、話し合う「今こそ！　金融経済教育を」シンポジウムが6月21日、千代田放送会館ホール（千代田区紀尾井町）で開かれる。主催はNPO法人　金融知力普及協会で、東京工業品取引所と先物協会が協賛。後援はNHK。

第1部が「金融経済、激動の時代をどう見るか」、第2部が「今、なぜ金融経済教育が必要なのか」、「次世代のための金融経済教育とは」、「金融経済を読み解く力をもつには」。

コーディネーターは金融知力普及協会理事の野中ともよ氏が務め、パネリストは以下の4氏。

●伊藤　元重（東京大学大学院経済学研究科教授）…ビジネスの現場を取材し、生きた経済を理論的な視点を踏まえ、鋭く解き明かす。テレビ東京「ワールドビジネスサテライト」のコメンテーターとしても活躍中。

●藤原　和博（杉並区立和田中学校校長）…2003年4月より現職。都内の公立中学校初の民間人校長として話題を集める。元リクルート部長としてのビジネスセンスを校長授業として実践中。

●濵田　隆道（多摩大学大学院客員教授）…1975年、通産省に入省。環境、新エネルギー、産業技術などの問題に係わり、経済産業大臣官房審議官も歴任。2002年より東京工業品取引所専務理事。

●辰己　琢郎（俳優）…京都大学文学部卒。NHK朝の連続テレビ小説「ロマンス」で全国区デビュー。以来、知性・品格・遊び心と三拍子揃った俳優として、また食通・ワイン通として、様々なジャンルで活躍中。

【コーディネーター】

●野中　ともよ（NPO法人　金融知力普及協会理事）…NHK、テレビ東京等で番組メインキャスターを歴任。スポーツ、国際政治、経済まで、笑顔で鋭く問題点を追究する力量には定評がある。

証言・戦後先物史

全商連の役割と歩み（2）

（社）全国商品取引所連合会　元常務理事　上遠野　次男

20取引所で社団法人に

――法人化のいきさつについて。

上遠野　昭和32年に全国商品取引所連合会に改め定款で会長、副会長、常任理事、理事、監事の選任及び事業範囲の拡大が明定化されました。初代会長に豊島久七（大阪三品取引所理事長）、副会長に加藤兵八（東京穀物商品取引所理事長）が選任された。この組織が42年にそのまま法人化されたわけです。

法人化にはいろんないきさつがあって、42年7月に施行された商取法の第8次改正のための商取審議会とのからみで、検討事項の一つに「全商連の法制化の是非」があげられました。しかし、結論としては「現在の事業内容では法制化の必要がなく、将来公益性の事業を行う場合には、その時点で検討する」とされ、事業効果をさらに増進させるための社団法人の提唱があり、これを承けて42年4月19日に設立総会を開き、6月30日付で認可されました。

――現在の7取引所から見ると20取引所の連合会はかなりの大所帯で個性的だったでしょう。

上遠野　まさに、今は昔の物語じみますが、商取界の現在の若手中堅から聞かれることが多いので、設立の許可（登録）番号順に当時の取引所を略記します。

初代会長
鈴木　四郎

二代会長
三木　瀧蔵

大阪化繊、福井人絹、名古屋繊維、東京繊維、大阪三品、横浜生絲、神戸生絲、豊橋乾繭、函館海産物、北海道穀物（元小樽商品）、神戸ゴム、大阪砂糖、東京砂糖、前橋乾繭、大阪穀物、東京穀物、神戸穀物、東京ゴム、関門商品（元関門穀物）、名古屋穀物の20取引所で、これに57年の東京金が加わります。

――法人化後の歴代会長さん達は、多士済々でしたでしょうね。

上遠野　物故された方が多いのですが、昭和に限って敬称抜きで順にみますと、初代は鈴木四郎（東穀）、二代目の三木瀧蔵（神糸）、続いて西田嘉兵衛（東繊）、鈴木一（東穀）、神原武雄（三品）、坪野光男（神穀）、木村修吉（大繊）、鈴木正武（東ゴム）、石田朗（東穀）、十代目の渡辺佳英の方々です。総じて実業界の方々は面白く、事務局役職員も注文をつけられながらも可愛がってもらいました。

――連合会としての活動や重点的な事業などについて。

上遠野　公益法人化以降は特に対外的な責任と活動が求められると共に、商取法改正の要望と改正後の取引所運営の諸制度の改善と統一に向けて、制度政策委員会を頂点とする各種専門委員会を設けました。

拝見

東穀寄席

満員の盛況が続く

録音テープから流れる太鼓と三味線のお囃子に乗って5人の若手落語家が次々と登場、ご機嫌を伺った。5月20日の東穀寄席は、年配の男女を中心に150席がほぼ満員の盛況。奇数月に開かれる。この日の演題は「黄金の大黒」、「不精床」、「位牌屋」、「豊竹屋」、「井戸の茶碗」の五つ。

落語家が日ごろの精進を披露、話し方や仕草に会場は、笑いや拍手で和やかな2時間が過ぎた。午後5時半の開場前から並び、先頭にいた船橋市と葛飾区から来られた年配の女性2人は「1年前から来ている。なかなか入場券が当たらないが、楽しみにしている。顔の表情がよく見えるのでいつも最前列に座る」という。この日の「とり」をつとめた三遊亭遊馬さんは「よいお客さんで、若手の話も辛抱して聞いてくれる。普段できない出し物も時間を気にしないでできり、励みになっている」と話す。東穀寄席はしっかり根付いてきている。

東穀寄席がスタートしたのは、今から13年前の平成4年5月のこと。第1回目の5月22日には6人の若手落語家が出演し、三人が口上、残り三人が「子ほめ」など三題を熱演、特別出演として落語業界の重鎮である柳家小さん師匠も応援に駆けつけた。このほか、第5回目には古今亭志ん朝、第7回目には三遊亭小円歌の人気の両師匠も特別出演。その後、真打ちに昇進した落語家も数人出ている。

東穀寄席のきっかけは、東穀で売買手法の変更から一階にホールが誕生。当時の森川専務理事がその活用を巡って、地元の人形町商店会有志との話し合いから、かつてこの地にあった寄席を復活させた。東穀は取引所のイメージアップと地域社会とのコミュニケーションを図る一つとして、商品先物取引所の性格から将来のびる可能性のある若手落語家に勉強の場を提供することになった。東穀の比嘉常務理事は「当初は地元の人形町界隈からのお客さんだったが、マスコミに紹介されたこともあって、現在では地元の人形町、都内、近県から来る。毎月70～80人が定員をオーバーするので抽選にしている。参加者は50歳前後で、女性が70％とやや多い。今日のこの人気は、先達の先見の明です」とうれしい悲鳴を上げるほどになった。関係者によると、抽選に参加せず、会場に押し掛けて空きを待っている常連客も数人いる、という。